

第6回弥生いこいの広場隣接地利活用市民懇談会  
会議録【議事概要】

日 時：平成24年8月8日（水） 午後6時半～8時20分  
場 所：船沢公民館中研修室  
出 席：澁谷リーダー、メンバー6名、計7名  
欠 席：4名  
事務局：3名

---

1 開会（定刻）

2 前回の会議録の確認

- ・事前に修正意見はなく、当日も修正がないことを確認した。
- ・市のホームページにおいて会議録を公開することについて了解を得た。

3 作業

- ・澁谷リーダーが前回の懇談会の内容をおさらいし、資料について説明。
- ・その後、地形図のゾーニングについて、個別の問題点、アイデア、その他について議論する。

【澁谷】

ヒントとして、竹浪さんの方から一枚の資料が提供された。弥生スキー場跡地利活用検討会報告という資料だが、竹浪さんから説明をお願いする。

【竹浪】

一昨日、岩木山を考える会の阿部会長をはじめとした諸団体の5人が参画センターに集まって検討会を開いた。私は数年間、跡地で観察会をやってきているが、それにずっと参加してきたので、今回は新たな知見、知識も伺うことができた。検討会での意見を大雑把に4つに整理した。

1つ目は、利活用にあたっての基本的事項として、外からの持ち込み、持ち出しはもちろんだが、跡地の中のもので利活用を考えるべきではないか。

2つ目は、何のために観察路を作るのか。お客さんをたくさん集めるのを目的としているのか、イマイチ目的がはっきりしない。何を見てもらうのか、どうすれば利活用が進むのか、ということについていろんな意見が出された。

市が購入した広大な土地を、子供たちのためにどのように活かすかという視

点は大事ではないか。

珍しい動植物を前面に出して人集めをすれば、それらが持ち出しされてしまうのではないか。だから、刈り払いくらいにして、そっとしておいたほうが良いのではないか。だんぶり池では当初、カワニナがたくさん生息していて、ホタルがたくさん発生した。商売としてカワニナを盗む人が後を絶たなかった。そのため、週に3、4日も寝泊まりして監視したそう。そうしているうちに、ホタルの評判が知れ渡ってお客が来るようになった。その結果、人が来るために盗めなくなり、盗む人がいなくなったということだ。最初は苦労するかもしれないけれども、いろんな人が来るにつれて盗掘も避けられるのではないか。

ザリガニの観察だが、オートキャンプ場と跡地の境界付近が沢になっている。今まで下のほうでザリガニを観察しているが、これは上の方にもあるに違いない。これについては、私たちも調査しなければならないが、歩いて沢にすぐにアクセスでき、これはポイントになるのではないか。

山菜採りも大いに推奨するべきだ。特に、山菜採りを制限する必要はないであろう。

ツリーハウスについて、木を傷つけないようにうまく利用すれば良い。

ガイドは常駐させなくても良いのではないか。また、観察路は観察会等のみ開放し、普段は立入禁止にしてはどうか。反対に、観察路への利用の敷居をなるべく低くして、入りたいと思った人ができるだけ入れる体制を作っていれば良いのではないか。

休む場所を設けるとしたら、丸太を活用するなどして人工物の設置は行わない方が良いのではないか。

見晴らしのことでいろいろと意見が出されたが、展望台のアイデアが出された場所について今は見えているけれども、多分5年、10年と経てば、斜面から木が生えてくるので、眺望を確保するため、その木をいつも伐らないといけなくなるであろう。その例として、編笠林道は座頭石から久渡寺へ抜ける山道だが、あそこも市内を望めるすごく良い展望台だった。今は杉で全然見えなくなってしまった。展望台の付近にベンチもあった。刈り払いしており、休めるような場所も作られているが、今は利用者が少ないようだ。

また、座頭石の遊歩道もそう。山の上に登れるような道路もついていて、池も作ったりした。休める場所も作ったり、見晴らし台も作ったりしたが、結局、利用者が少ないのが現状である。だから、ただ見晴らしが良いというだけでは、人が継続的に来ることは難しいのではないか。もっと関心を引くものを考えたほうが良いのではないか。

3つ目は、自然観察路の敷設と設置方法について、ある程度広めの道と人が歩けるくらいの道を区別したらどうか。砂利が敷いてある、昔の作業道。オー

トキャンプ場との境界付近から下がっていったところだが、そこは砂利を敷いて一旦道路ができたところだから、ここは道路として積極的に刈り払いをして、広めに作っても良いのではないか。

それとは別に人が歩けるくらいの道を区別して、西側の雑木林に観察路を作ったらどうだろう。

東側湿地と南側の苔しか生えていない場所というのは、元ターミナルがあった場所で、そこは下がまだコンクリートが残っており、ほとんど苔ぐらいしか生えていない、裸地になっている場所。この辺の間に沢が1つ走っているが、沢を乗り越えながら周回できれば良いのではないか。

東側の湿地帯には木道で観察路を設置してはどうか。ただし、湿地に杭を打つことは避けたほうが良い。杭を打って水が溜まっている層を突き抜いてしまうことがあって、突き抜いてしまえば湿地が枯れてしまう。八甲田でそういう例があるので、そこは慎重にやったらどうか。石やブロックを置いてその上に板を敷いていく。板は杉がすぐに腐ってしまうので、ヒノキの方が良い。

4つ目は、安全対策。入口からロープ塔小屋まで崖が深いので、西側の山側を刈り払いして崖のほうをいくらか残すようにすれば、そちらの方に転落することを防げるのではないか。

それから、不法投棄をどのように防ぐか。あとサインは要所、要所で必要だろう。

西側のトイレ跡、南側のコンクリート堰も危険だ。

#### 【澁谷】

具体的な整備の方法などの話が出されたようだが、別に我々がそんなことを考える気はない。こういう風なものがあっても良いだろう、ということで貴重なご意見だ。ただ、気が付かなかった点としては、オートキャンプ場とナラの木林の間の細い沢。そこにザリガニがいるというのは知らなかった。あそこだったら、安全に水辺のものを楽しめる空間になるのではないか。

#### 【堀内】

杭の関係などおもしろい。不透水層の抜ける話などは、意外に気が付かなかった。あとトイレ跡、コンクリートの人工物は人がどの程度入りやすい場所にあるのか。危険がどの程度あるのか、前々回参加できなかったの。

#### 【澁谷】

ゆくゆくはそのような危険なものに対して対処しなければならないが、またそれで、工事車両を入れるとなるとどうか。

私もかつての仮設道路、砂利を敷いてある工事車両道路を歩いたが、結構流されたり、木が侵入したりして、下から行くとすぐ行き止まってしまう。それをさらに整備するとなると、どうなのかなという気はする。

かつての跡地や荒れてしまったところにもし手を付けるのであれば、機械が入ることを考えなければならない。それは今すぐでなくても、後々でも良いのではないか。ロープ塔のそばのミズキに動輪が絡んでいた。あれも長い年月であのようになった。もしかしたら、コンクリートの基礎が自然の力に打ち負かされて、自然には帰れないかもしれないが、木の中に埋没していくことも無きにしも非ず。

皆さんがいろんな話をしていくと、結局、管理の話にどうしても行きついてしまう。解放したときに展望台は木が生い茂ってくると見えない。見えないところに入ってもおもしろくない。ここはもともと二次林なので、ある程度手を加えておく。ただ、本当の深い森にするのか、活用する場所にするのかを考えなければいけない。

福島の子供たちを先月末から白神地区と下北、十和田で受け入れている。今、下北半島の方に60人ばかり行っている。先月7月22日から8月2日までは白神地区に60人ばかり受け入れていた。福島の現状は、まだ線量が高いそうだ。森には当然入れない、公園にも入れない。学校の校庭の除染はしているが下がらない。非常に制限されている中で、いつでも森に入れる青森の人がうらやましい、ということをやと語っていた。そのような状況でも十二湖をトレッキングすると、子供たちはすぐ飽きてしまう。木の説明をしても子供たちは興味がない。子供たちの興味があるのはクワガタやカブトムシがどこにいるか、虫がどこにいるか、それしかない。たまに、池をみると驚いている。小さい子供たちは植物に関心を示さないのが実情だ。

岩木山の8合目から上ったが、4歳児が頑張って山頂まで登った。きちんとしたサポートがいるとできる。子供たちも怖さを知っている。登山道にはロープは無いし、反対にルートを示すトラロープを触ったら危ない。確かに危険な場所がここにはある。無理やり仕切って、ここは安全だというよりも、ある程度危険だという風にしても良いかも知れない。今まであまり語られていなかった昔のロープ塔のあったスキー場の跡地を何とか楽しくしたい。そんな楽しい場所を考えつつ、中央部をどうするかという風になっていけば良いだろう。

#### 【阿部】

私たちが子供たちを連れて、嶽の水芭蕉沼の植物に名前の札を付けたことがある。それは、弘前市のボーイスカウト、ガールスカウトを連れて行った。5年生の女の子がリーダーで17、18名くらい行った。私たちは植物の名前を

4、5種類教えた。そして、札をたくさん作って、自分で書いて自分でつけて、間違ったら消して書き直すようにした。子供たちは上手で、飽きずにつける。だから、余計に世話をしたり、過重の期待をしてものをやらせれば、子供たちはダメ。観察でもそうだ。今回はザリガニの卵が付いている時期だからひっくり返してみよう、また、モリアオガエルの卵が木の上、水の上にあるものもある。子供たち相手では課題一つ二つでやって行かないといけない。その場合、課題別の観察コースというのは一つの重要なポイントを作っていく。

【澁谷】

そうなってくると、そんなことができる人、ガイドさん、案内人がいないとできない。コースはいろんな場所があるから何とかコース、何とかコースと名前を付けられる。でも、何も知らないと、何だろうしかない。その辺の人をどうやって育てていくかを考えていかなければいけない。

【前田】

個人で子供を連れて山に入るかと言えば、もしかしたら入らないかもしれない。いこいの広場に来る子供たちは遠足や社会見学で来ている。そういう時にガイドさんをお願いできる。いつもでなく、その時だけでもガイドさんがいたら良い。学校との調整で必要な時に要請すれば、ガイドさんも負担にならない。

【澁谷】

前田さんが話したように、いつも必要ないし、ある時期に集中するだろう。

【前田】

おそらく個人で子供を連れてくる人はお父さん、お母さんがいつも山に入っていて山をわかっている。ちょっと入ってみて、何かを見る程度だと思う。全体を回るとなれば団体で来た人たちである。その場合、ガイドが必要になるのではないか。

【澁谷】

確かに、いこいの広場とは違った感じにはなる。なおさら、そういう人たちのために説明する人が必要となってくる。いこいの広場は完全に整備された安全な場所だ。もっと野性的な感じにしたほうがおもしろいのではないか。

【前田】

カブトムシやクワガタに興味がある子供たちはワクワクする。散策してたま

たまクワガタなどがいたら、すごく喜ぶと思う。

【竹浪】

ガイドの組織が整備されれば、すごく使いやすくなると思う。六戸の小学校の先生から、鳶沼の観察のためにウォッチング青森に要請が来る。毎年3、4人のボランティアガイドの要請が来れば行っている。いろんな自然の楽しみ方を教えながら、一日を楽しむ。ガイドとして組織的に整備されているわけではないので、われわれのような自然保護協会の観察指導員を頼って要請がある。市などが先立ちとなれば、頼みやすいのではないか。

【澁谷】

私はだんぶり池を作ることに携わってきたので、やはり、案内をしてくれ、ガイドをしてくれという話になる。整備されてからガイドを養成してもあまりピンとこない。自分たちが整備していく段階でいろんなものを発見し、覚えていく。ガイド養成というのは、整備から関わっていった人たちが自然にガイドになっていく。そういう人の集め方を考えたほうが、あとあとの管理も含めて良いかもしれない。いろんな人が入ってきて良いし、当然地元の人が入ってきてくれないと困るだろう。例えば、それをいこいの広場あたりでまとめることは良い。そうすれば、学校から要請が来ても今回はどこをお願いする、何人くらいの派遣をお願いするということになれば、ボランティアなのかある種の有志になるのかわからないが、発展性がある。

【阿部】

気になっていることがあるが、ジャバラみたいな配水管はどうなんだろう。

【澁谷】

あの暗渠排水はまだ活着ている。

【阿部】

あれがおそらくなくなれば沢が活きる。

【澁谷】

今、阿部さんが話しているのは、オートキャンプ場の東側の沢。あれはスキー場をつくるために埋めた。伏流水などの水が集まってくるために、暗渠排水で太いジャバラの穴が開いているのを埋設して、周りの水を吸い出すようにしている。それが、土木工事の場合、最初にやるので敷設されてしまった。それ

ができて、管理がされないまま工事が終わってしまった。そして、どんどん土砂が詰まり、途中で露出したり、現在醜い形で残っている。見に行こうと思えばいけるが、普段は目に触れない状態になっている。今のところ、まだ水は流れている。確かにそれを撤去してしまえば、かつての沢はできるだろうが、そのために沈砂池の方にまた土砂が入っていく。そうすると、また防災の話になってくる。かつての形を復元する、しないということを懇談会の中で提言としてまとめることは決して悪くはないが、それをしたときのリスクも含めて考えないといけない。それこそ、防災の専門家を呼んで話を聞かないと何もわからないし、我々がそこまでの話をするべきでないかもしれない。

【阿部】

この前の弘大の先生の話だと、この程度の傾斜であればここでは土石流は起こらないだろう。この場所はね。ただ、こちら側の壁倉沢は、上の集水池が大きいから集水池のあるところだけであれば、傾斜も少ないから土石流はないであろう。この沈砂池が果たして必要かどうかは聞かなかったけれど、そのあたりも含めて考えてもらえれば。沈砂池はこういうことで造っているわけだから、周りに子供たちが行けば滑って落ちる可能性がある。普通の土手と違って、かえて良くない。自然の土手だと木がたくさん生えてくるので、それに掴まることもある。あれは、ポリをやって水を溜めているだけだから、普通のものに使えない。これで良いのかという問題もある。私らは上に木が生えてきたし、この沈砂池はもう必要がないという解釈をしている。だから、危険性をなくするため無くしてしまえと。あのポリを取ってしまえば、埋まってしまうという感じ。そういう問題も含めて、専門の人たちに意見を聞いてもらいたいと思っている。例えば、ジャバラのようなものもそのままにしておけ、となるのか。費用的なものもあるのでそれで仕方がないとなれば、危険防止にできるだけここに立ち入らないようにするなど、対策が必要となってくる。あれは、滑る、泥がついていたり、濡れたりしていると。だから、あれがある場所を渡って歩くのは非常に危険だ。

【澁谷】

阿部さんが言おうとしていることは、工作物はどうするのかということ。

【竹浪】

せめて、あのジャバラの土から出ている部分を切ってしまうと、だいぶ違うのではないかと。あれを下から抜いてしまえば大工事になり、とてもできるものではない。だから、出ている部分を切ってしまうとどうか。

【阿部】

大蛇のように沢の中に寝ているわけ。そうすると周りをあちらこちら削って水が流れているので、不自然になって沢が死んでいる。

【澁谷】

あまり広い土地の中を全部活用するわけにはいかないもので、当面活用できないところ、活用できるところを色分けしていかないといけない。最終的に、かつての自然のように戻すということは、今すぐは難しい部分もある。

【竹浪】

私はこの溜池、沈砂池のある下のほうはしばらく、そのままにしておくと思っていたのだが。

【澁谷】

それはそう。防災に関わる話なので、あまりこうする、ああするという話はない。ただ、前回水辺の観察や水辺の遷移の話が調整池付近で出ているので、もしそれをやるのであれば、人が入る可能性があるのか。

反対に、殿様道路のほうは不法投棄のことを考えて、整備などは防災の話だから少し置いておいても良い。

【竹浪】

調整池の観察は、先日実際に行ってみたけれども、とても観察できるような水の流れ方でない。入って行くとズブズブとぬかっていく。胴長でないと入って行けない状態であった。

【蒔苗】

機械を使わなければならないとなれば、予算的なものがあるので、今であれば立入禁止、入らないようにしたほうが良い。危ないところに子供を近づけたくない。団体で来ればいこいの広場に来た人たちが入る。個人、家族で来れば動物広場に来た時に入る。オートキャンプ場に来た人は、日中、山に入ってみたりする。団体だとガイドさんを付けることが多いのかな。沈砂池は危ないので、整備するよりは当面、人を近づけない方が経費もかからず良いのでは。

沢、水辺ということであれば、オートキャンプ場の境界の沢にザリガニがいる。昔、いこいの広場の炊事場のそばにザリガニやサンショウウオがいたので、あそこもここもというのではなく、ある程度絞ったほうが良い。



アプローチ道路の右側をきれいに整備して花でも植えれば良いが、最後に草に埋もれてしまうのであれば、誰か草を刈らなければならないし、花が枯れれば処理しないとしないので、管理はどこがやるのか、誰がやるのか。

【阿部】

昔は弥生に来ると言えば、ここの溜池を一つの目標にしていた。溜池の周りにはだんぶりがいる。ヤマトンボがいるし、カラカネトンボがいる。それが、欲しいので中学校の頃、来ていた。こういう池の周りを芝生にすれば、嶽の水芭蕉沼と同じで子供たちはヤマトンボをいっぱい捕っている。トンボのほうが子供たちより上手だ。トンボを採っても採れきれものでもないし、いっぱいいる。だから、ここの場所は活かせるはず。この池は、昔からの池だ。

【竹浪】

ここのアプローチはどこからか。

【阿部】

昔は北側から入って行った。

【澁谷】

殿様道路から東側は現状のままで良いという気がする。無理に何かをやれば問題が起きるだろうし、あくまでも、不法投棄を何とかやめさせるための方法を講じなければならない。

【神】

基本的に皆さんと一緒に意見だが、子供たちをいかに集めて楽しんでもらう場所にするか考えなければならない。あと、いこいの広場の近くなので、いこいの広場に来た人たちが、さらに楽しむための自然環境を見られるような場所になれば良い。

遊歩道を歩いていき、オートキャンプ場の境の沢をザリガニ広場などと呼んで、そこで遊びながら西側の遊歩道を歩いていき、次に、植物観察広場とか名前を付けて、観察しても良い。

西側の広場を山菜広場にして山菜を採るのも良い。

東側の湿地帯は木がないので前回の懇談会で出たニレの木を植えて、カブトムシがくれば、子供たちが喜ぶ。子供たちもあそこに行けば、カブトムシが捕れる、女の子は花や植物を見られる、ということを目標にしていけば良い。本当は自然のままが良いが、自然に近い形で木を植えていけばおもしろい。

ガイドさんはいこいの広場のつながりということで、いこいの広場の人たちがある程度やってくれても良い。どんどん人が集まるようになれば、いこいの広場で働く人数を増やさなければいけない。

#### 【澁谷】

いこいの広場や動物広場などの整備されているところと上手く関連付けなければならぬだろう。いこいの広場も動物広場もオートキャンプ場も整備されているので、どちらかと言うと提供しているという感じ。この場所は何も整備されていないので、全く別な形で来た人が少しずつ手を加えていける場所になるかもしれない。

前に話したが、ナラの木林に入ってドングリを拾ったり、小さな実生を集めていって、観察路で植えるなど。自分たちが将来の大きな森づくりの手助けを少しするというのであれば、人を無理やり引っ張ってきやすい。

今までのできているものとは、全く違った方法の利活用を考えても良い。そうすると無理やり整備しなくても済みそうだし、反対にそのために人が入って切り株でベンチを作ったり、手を加えていけるだろう。そのために、今回まで休んでいたが、岩木山自然学校の高田さんのような人が、人を育てるためレクチャーしてくれれば、ツリーハウスができたり、木登りができたり、クワガタを捕ったりするような楽しい活用ができていく。

入口から北側までの遊歩道から西側は利活用の場所で、それぞれ意見が違う。反対に東側の大きな丸は、来た人たちが森を作っていく、育てていく場所にして、湿地なので木道を作っていくというのも良いかもしれない。それが、間伐された木で作っても良い。方法としては、不透水層を貫通させないように杭ではなくて別な方法を考えなければいけない。そうすると、だんだん色分けがはっきりしてきて良い。

あとアプローチ道路沿いの緑地というのは、花を植えても、すぐ草に負けてしまうというのは事実。ワイルドフラワーと書いているが、こぼれ種がどんどん咲いていって非常に良いが、外来種がほとんどだ。外来種がもともとの植生をダメにするかと言えば、外来種も結局は雑草に負けてしまい、無くなってしまふ。ただ、在来種だけでこの広い面積を目新しいものにできるかと言えば難しい。

#### 【阿部】

前に岩木山を考える会での観察会で、辺り一面にドングリが落ちていた。三浦先生が拾い、10人くらいの人が湿地帯に下りて蒔いた。今は1本も育っていない。確か、芽は出たが、全部死んでしまつて1本も育っていない。湿地帯

の道路沿いの一部にナラの木の実生が生えている。それがどうなるのか楽しみにしている。その場所はマツを植林した場所だが、マツが育っているのはほとんどない。マツが育っていないのにナラの木の実生が出てきているから、どうなるか楽しみにしている。マツの苗は営林署などで買ったものだと思うが、営林署の苗というのはスギにしろ、マツにしろ、カラマツにしろ、ものすごく年代をかけて、努力をして選抜したものだ。どんな環境でも育つ、良い品種。スギやマツ苗、カラマツの苗の選抜を青森営林局で力を入れてやってきた。だから、どこに植えても育つ。赤石の上にあるスギの原生林のスギの苗を植えても育たない。選抜を繰り返してきたから、優秀な苗ができています。昔、赤倉の上の砂防えん堤付近に大分植林をしたが、今生きてるのは1本か2本だ。

そういうわけで、植林は非常に面倒である。だが、ドングリを湿地帯に蒔くというのは決して否定はしない。その中で、きっと良いのが当たる。だから、そういうことで否定しない。ただ、意図的に植林をしようとするのはどうかと思う。真ん中の苔しか生えていない場所も、たくさん種が落ちたはずだが、何も育っていない。

【澁谷】

ここではすぐの結果は誰も求めていない。百年後に3本くらい育てば良い。

【阿部】

そういうことも実験の一つだから、どんどんやってみれば良い。ただし、穴を掘り植物を抜いて、違う植物をそこに植えるということはやめたほうが良い。

【澁谷】

そこまですることはないが、来た人たちが楽しみにしてナラの木林から持って行って、植えるというのはおもしろいかもしれない。

【阿部】

ハンノキに関しては何も無いところに生えてきた。普通のところであれば土砂崩れが起きたところに一斉に生えてくる。ある程度大きくなれば、ハンノキカミキリが卵を産んで間引きしてしまう。周りの害虫と呼ばれる虫が来て間引きして、ちょうど良く森をつくってくれる。しかし、あそこは大きくなってしまったから、場合によっては間伐しないといけないかもしれない。それは、専門家の樹木医からご意見を伺えば良いと思う。

【澁谷】

湿地帯にはハンノキが繁茂してきている。あれはあれで遷移してきているので良いと思う。気になるのは、シラカバが木になるかどうか。

入口から北側までの遊歩道から西のほうは利活用していても良いのではないか。特に、ものを作るわけではないから、マンパワーなどの工夫次第で良いものができるのではないか。

中央部に関しては、遷移を見守ったり、ナラの木林からものを持ってきて植林したり、将来大きな森ができるように楽しみを残しておく。

殿様道路から東側の部分、ここは何もせず、今のままで少しおいておく。不法投棄に関しては、何らかの手立てを打たないといけない。

それと、アプローチ道路沿いを少し何とかしないとブッシュのままになってしまうので、なにか考えないといけない。あそこは本当に目立つ。あれもゆくゆくは、森になってしまうと思う。

【竹浪】

早いうちに森になってしまうと思う。

【澁谷】

もともとあそこは畑だから、黙っていても、結構、森になりつつある。あまり気にしなくても良いのかな。

【竹浪】

あまり気にしなくても良いと思う。むしろ西側の広場の活用をどうすれば良いだろう。

【澁谷】

この前のアシが枯れた状態を見て、その状態しか知らないから。

【竹浪】

今は我々の背丈より高く、誰も入って行けない。

【澁谷】

木も生えないくらい、アシがびっしり生えている。竹浪さんが言うようにかつては見晴らしが良かったが、木がどんどん生えていって今は何も見えない。展望台を作っても同じことが考えられるだろう。願わくば、西側の広場の2つの部分と展望台付近をどうすれば良いだろう。多分、今のような一番良いシーズンに入ったらブッシュだから、誰も入れない。アシはひたすら刈っても、地

下茎で増えますから簡単に繁茂する。ましてや山だから、火入れもできない。

【阿部】

木造の高山稲荷の向こうに谷地があって、その谷地が、アシガヤで動きが取れなくなるくらい生えてしまった。それをどうにかしようということで、15、16年前に集まっていろいろ対策を考えた。その時にいろいろ文献を読んだら、アシガヤとススキは5月、6月に刈れば、かなりダメージを与えることができる。ということがわかり提言したが、県で全然お金を使わないので、今はもう人が入れないくらい生えて、乾燥している。湿地帯がほとんど使いものにならなくなってしまった。

嶽の水芭蕉沼、小学校の下からキャンプ場の緑地のへりはずっと湿地帯で谷地だった。そこは、水芭蕉もたくさんあったが、みんな刈って芝を張ってしまった。その岸の道路際だけは、そのままにした。なぜかというと、湿気が強かったのだ。そうしたら、アシガヤが生えてきて貴重なゴマシジミというチョウチョウがいるが、絶滅寸前だ。そこで、岩木山を考える会では7年ぐらいに渡って少しずつ刈った。5月、6月の時期に刈って、今やっと効果が出てきた。アシガヤが薄くなって、人が入って行けるようになった。それで、初めて実験できて、こうしてやれば良いというのがわかった。

だから、そういう風に弱くしていく方法がある。また、芝刈機で刈れば、非常に困ることがある。水芭蕉沼をみんなで管理しようと言ったのに、嶽の町内会は「岩木山を考える会」とは一緒にやらないと言った。仕方なく、我々が手を引いた。そうしたら、水芭蕉沼の草地を芝刈機で刈った。あそこに生えていたセンブリは全滅した。

こういう風にいろんなことが実例としてあります。面倒でも鎌で刈ってあげれば、センブリは残ってあった。

【堀内】

常盤野のほうでアシを刈った時には手刈りだったのですか。

【阿部】

もちろん、鎌で刈っていました。あと、肩掛けの刈払機も使った。チョウチョウも何匹か戻ってきている。8月26日にチョウチョウの観察会を行う。まだ、発生していないが、20日頃になるとでてくる。

ススキはススキでどうしようもない訳ではなくて、刈れば利用できるように変化させることはできる。

【澁谷】

実例を挙げて、実践した本人が言うのだから間違いはないと思う。これを利用するためには、かなり手を加えなければだめだということだ。

この前入ってワラビはたくさんあって良かったけれども、見晴らしが本当にきかない。あそこの場所は少し木を間引いたほうが良いか。

【阿部】

眺望する場所であれば、間引きしたりすることも良いが、目的だ。

【澁谷】

何をさせるか別にしても、せつかくナラの良い林が残っていて、かつてのゲレンデがあったところは、アシやいろんな植物が生えてきている。ナラの木林が入ってくるのであればわかるけれど。2つにわかれているが、片方は全部とは言わないが、少し間引きをしながらもう少し別な形になっていくような、人が手を加えても良いのではないか。間引きした材料を使って丸太のベンチや木道を作るなど。

そうなってくれば、ここに手をかけた人たちがガイドみたいなことになっていかないとまずい。

例えば、蒔苗さんや神さんなど地元にいるかたで、秋口まである程度日にちが決まっていて、あれこれやるとなった場合、参加するか。

【神】

将来の目的などがきちんとしていれば。例えば、将来的にこうなるということが理解できれば、協力してくれる方もいる。全体が漠然としているようだ、どうかと思う。明確なものがあれば良い。

【澁谷】

その辺だ。何度もダンブリ池の話をして恐縮だが、あれは完全な休耕田だった。あの上に田んぼがなかった。環境パートナーシップのメンバーの1人が話を持ちかけられた。休耕田なのでヤナギがずいぶん生えていた。小さい沢が2本入っていて下はまだ水田を作っている人がいた。水利権とかいろいろあるようだが、水を流して特に止めたりしなければ問題ないだろう。かつての水田を復元すれば、また動植物がかえってくるのではないか、という思いから始めた。それで、ヤナギを手で抜いたりしてあのようになった。1年間かけてそんなことをして、もう1年で県有林から木を伐り出したり、木道を作ったりということをマンパワーでやってきた。できないところは機械が入って行った。あくま

でも、市民のためのダンブリ池という題目はあったが、結局、やっているのは環境パートナーシップがメインだったので、環境パートナーシップのものだというイメージが定着してしまった。できてしまった後に、利用だけしてあとは手を加えない。ここは、マンパワーを利用し作っていくのであれば、そんなことは避けたい。ある種の団体だけが入って、その団体だけがやっているとすればものすごく嫌われる。やはり、弥生地区の人も含めていろんな人が関わってやる。先立ちは団体ではなくて、地区の人たちがメインとなって組織されていくと、あとあとまで続いていくので良いのではないか。

課題の中でも、管理の話が一番大きな話になってくる。その中で協働して森づくりをいろんな団体が入ってきてくれるともっと続いて行く。

#### 【竹浪】

アシの場所などをナラの木林のような森にかえていこう。そういうことを地域の人と一緒にいろんなことをやりながら、観察会をやるような取り組みができれば良い。

#### 【澁谷】

今の状態ではナラの木林はずっとそのままだし、周りもそうだし、緑の豊かな森なので皆さん参加して、いかに手の入っていない部分と人工的な部分との差は体感してわかっていると思う。

広場と書いてあるところは、将来森になっているかもしれない。それが大きな森になっていって、その森からでたドングリとか、実生が中央部の方にどんどん供給されていく。今の話の中で、大きなゾーニングは見えてきた。

殿様道路から下は現状のままで防災対策をきちんとする。中央部は湿地帯の遷移の観察も含めて、森づくりのためにドングリを蒔く。とにかくひたすらやる。上に関してみれば、今あるナラの木林を活用しながら広場にしていくなのか、森にしていくなのかを検討していこう。それを動物広場やいこいの広場に来る大人や子供を引き入れながら、自分たちで手を加えながら作っていく場所にできたら良いと思う。

大きく3つくらいのくくりにして、細かいところはいろいろ出てくると思う。あと具体的にザリガニがいるオートキャンプ場は楽しくする、ツリーハウスを作る、自然で遊ばせる、木登りができるなど。

#### 【阿部】

木登りできる場所はあっても良い。

【堀内】

いろんな接し方はある。日本の場合は管理している、所有者の管理責任など、オープンエリアだけど本当の意味でのオープンエリアではないところが多い。だから、アメリカの人が弘前公園にコンロや炭を持ってきて、煙を上げる時がある。そうすると職員が止めに行くと、なぜだめなのか説明するが、なかなか理解してもらえない。

やりたいことと現状にギャップはある。その中でベストな方法としてどこに収束するかは皆さんのお話を聞きながら、継続していくということが大きな問題ではないかと思う。

【澁谷】

ここが、供用開始になった時のイメージが湧かない。市の所有地である。でも、多分都市公園にはならないはず。公園という網は被せないであろう。

【阿部】

私らは当初、里山を作ろうと。子供たちがチョウチョウを取りに行けば捕れる。クワガタを取りに行けば捕れる。そういう豊かな自然のある場所にしたいと思っていた。しかし、ここはゼロから始まる非常に珍しい遷移だ。こういうところはおそらく、火山爆発で溶岩流が流れたところしかないようなもの。そのぐらいひどくやった場所だ。

【澁谷】

6回目の懇談会だが、皆さん現地に行って、いろんな話を聞いて何らかのイメージはされてきた。ただ、多くの市民のかたは全然何をするのか、そんなにここに目を向けていないのが現状。いこいの広場やキャンプ場に来て、こっちまでは来ない。もう自然にかえっていると考えているはず。

これが、懇談会の提言としてまとまった時にただ提言書がまとまった、と市のほうに渡すのではなくて、これを市民のかたに目を向けてもらう必要がある。

それは、弥生スキー場跡地という名前がついているが、もうちょっと前向きな名前が欲しい。それを公募したりするために、ここに市民のかたが入ってもらう機会が必要になる。特に、私たちは名前を考える必要はないが、せめて、市民の人たちにもう一度目を向けてもらうために、その提言書をベースにした名前をぜひ皆さん考えてください。そのために、ここで観察会をやったり、いろんなプログラムを考えなければならない。そのプログラムを考えた中で、試しにドングリはいっぱいあるのか。ここで、こういう風なものを考えているが、皆さん参加してくれますか。参加しましょう、というストーリーを考える必要



がある。

【阿部】

私が中学校の時は弥生に行けば、ザリガニがいるということが、弘前市内の子どもはみんなそういう風に考えていた。だから、神社の脇の沢に行けば、大抵いた。そういうことが私らの弥生というイメージを作った場所。

それと、鼻和周辺の人たちは弥生に行けば熊がいる。すごく見事にシメジが生える。ナラノキシメジとシメジが生える。それで、それを採るために当時はスターキングを手かごに入れて、かじりながらキノコを採ってきた。

そのように、弥生の森というのは非常に豊かな森だった。原っぱもあったし、畑もあったし、いろんなものがあったけれども、森は森なりに非常に豊かな森であった。そういうことを考えながら、これからの弥生の方向性を決めていけたら良い。

【澁谷】

たぶん、皆さんが目指すのは里山や森などのイメージはあると思う。

【阿部】

キノコは原生林にしてしまえば生えてこない。ある程度、人間が手を加えて時々木を切ったりするところがあると生える。特に、ホンシメジ、ダイコクシメジは細い木が育つところにしかない。木が大きくなると数がガクッと減る。そういうことを考えると、里山は豊かな森の代表だ。

【澁谷】

皆さんの意見、思いはだいたい同じ方向になってきた。そして、3つの大きなゾーンに分かれた。それをどうするか、こんな形でどうかというものを次回までに少し整理する。今後、ここはこんな風にして整理していけば良いというイメージを今回の話の中で拾ったので、それも少しまとめて皆さんに提示できたら良いと思う。

#### 4 閉会

最後に、次回の日程調整を行い、9月27日（木）の18時30分から船沢公民館中研修室にて開催することを確認し、第6回懇談会を閉会した。